

3つのお願ひ

元旦に自分の誕生した年の年号のある1円玉を見つければ縁起がいい、その人はその日のうちに3つのお願ひが叶^{かな}うのだ。

昔からあるそんな言い伝えをみなさんは信じるだろうか。私はそれを信じる。何故なら私は実際にそれを体験したからだ。

私はその元旦の朝、ケイコと初日の出を拝みに行つていた。その帰り道に何か光る物があつた。拾つてみるとそれは1円玉だつた。しかもそれには私の生まれた年の年号が刻まれている。

「あら、ヒロカ。正月から運がいいわね。それを拾つた人はその日のうちに3つのお願ひが叶うつて昔から言うよ。」

ケイコが人の良さそうな顔で言つた。ケイコは悪い人間ではないのだが、ちよつととろいところがある。

「まさか、そんなことがあるわけないじゃない。」

私はすぐに言い返した。そんなおとぎ話のようなことが現実にあるわけがない。

「あら、ほんとだよ。試しに何か願ひ事してみなよ。何か今欲しい物はないの？」

「まあ、今ちよつと寒いからもう少し暖かければいいなあってぐらいかな。」

私は冗談めかして言つた。その途端にさつきまで雲に隠

れていた太陽が現れた。本当にそれは魔法を使ったような唐突さだった。二人は黙りこくって私の家まで歩いて帰った。

「あら、案外早かったのね。」

台所から母が声をかけた。

「もうちよつとお雑煮ができるから、ケイコちゃんも食べていってよね。」

「はい。」

私たちは2階の私の部屋に上がった。しばらくしてからケイコがやつと口を開いた。

「ヒロカつてば人の言う事を素直に信じないから、せつかくの幸運を一つ無駄にしてしまつたじゃない。」

「どうして、そんなことを言えるのよ。あんなの偶然に決まつてるじゃない。私はあんたみたいに単純に出来上がっていないのよ。」

「単純って誰のことを言ってるのよ。」

「あなたのことに決まつてるじゃない。単細胞のぐずの馬鹿。あんたなんかとつと帰ればいいんだわ。」

ケイコの目にもみるみるうちに涙があふれてきた。そしてそばに置いていたポーチをつかんだかと思うと、次の瞬間にはものも言わずに家を飛び出していった。

私はしばらく呆然としていた。これで、もう二つの願いごとを無駄にってしまったわけだ。今度こそ慎重に考えなければいけない。私は自分の気持ちを落ち着かせようとした。

「ケイコちゃん、せつかく寄ってくれたのに急に帰って

しまったのね。どうしたの？けんかでもしたんじゃないでしょうね？」

心配顔をした母が私の部屋に顔をのぞかせた。

「何でもないわよ。ケイコはいつもあんな風なのよ。」

私は素っ気なくそう言った。

「・・・ねえ、お母さん。世の中でたった一つ願いごとが叶うとしたら、お母さんなら何が欲しい？世の中で何が一番価値があるものかしら？」

「あら、そんなの簡単なことじゃない。」

私は、思わず母の顔を見つめた。母は時々、ふだんの母からは想像もできないような鋭いことを言う。

「それはねヒロカ。友達よ、友達。たった一人でいいから信頼できる友達よ。」

母は事もなげにそう言った。なるほど、言われてみれば簡単なことだった。

私はケイコのことを考えた。私が友達の間で孤立こりつした時
もいつも私の味方をしてくれたケイコ。私の一方的な相

談事をいつも辛抱強く聞いてくれたケイコ。

私はあの1円玉を握りしめて玄関の外に出た。私はそこに立ったまま目を閉じ、時々1円玉をなでながら心の中で何回か願いごとを繰り返した。今度は真剣に、思いが天にまで届くように・・・。

しばらくして私は目を開けた。そうしたら道の向こうの方になつかしい人影が見えた。その人影はちよつと恥ずかしそうに微笑みながら私のほうにやって来た。

「ごめんねヒロカ。何にも言わずに飛び出してしまって。」

気分悪くしなかった？」

あかみ

まだちよつと赤味の残る目をしたケイコがそう言った。

「ううん。私のほうこそ言い過ぎてしまつてごめんね。」
私はそう言った。胸の奥の方が何か暖かい、なつかしい
もので満たされたような気がした。

みなさんは元旦に自分の生まれた年の年号のある1円
玉を見つけた人は幸運に見舞われるという昔からの言い
伝えを信じるだろうか。私はそれを信じる。何故なら私
はそれを体験したからだ。

問題 みなさんは3つの願いごとが叶うとしたら、何
を願いますか。一番欲しいものの順に3つを書き
出さない。

1

2

3